

# 会 議 等 結 果 報 告 書

会議区分	<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">会 議</div> ・ 打合せ ・ 協 議	文書番号	1434
		決裁期日	令和3年7月5日
名 称	令和3年度 第1回安平町未来創生委員会		
日 時	令和3年6月17日(木) 午前・ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">午後</span> 3時00分～5時00分		
場 所	安平町役場 総合庁舎 大会議室		
出席者	委 員 未来創生委員会委員8名(小林、島田、岡田、田中、吉田、垣内、廣岡、小野寺) 外部有識者 FPオフィス・スターサポート代表 星洋子 氏 札幌市立大学デザイン学部講師 片山めぐみ 氏 安 平 町 (政策推進課) 渡邊課長、山口参事、木村課長補佐、高橋主幹、笹山主査		
会議概要	<p><b>1 開会(進行:政策推進課長)</b>          ◇過半数の参加により委員会が成立していることを宣言          ◇人事異動に伴う職員紹介</p> <p><b>2 委員長挨拶</b>          ◇新型コロナの影響で書面会議が続き、委員が顔を合わせての開催は約8か月ぶり。          ◇本日は、報告事項がメインのようだが、任期最後の会議になる。改めて忌憚りの無いご意見を願う。</p> <p><b>3 議事</b>          (1) 地方創生推進交付金事業における令和3年度実施事業について・・・【資料1】          (説明:政策推進課 高橋主幹)</p> <p>◇継続事業の「真の復興を目的とした交流人口拡大による地域活性化プロジェクト」は、町のゲートウェイ施設である道の駅「更なる魅力化」と特産品コーナーや農産物直売所などに関わる「人やモノの活性化」を図るというプロジェクト。          ◇継続事業の「回遊交流による商店街賑わい創出プロジェクト」は、ゲートウェイの道の駅での集客を、商店街に回遊させて賑わいをつくるというプロジェクト。          ◇継続事業の「日本で一番世界に近いまちプロジェクト」は、町民の「遊び、学び、挑戦」の機会を創出することで子どもから大人の「新たなチャレンジ」を生み出し、大小様々なプロジェクトが町のいろいろなところで巻き起こることでまちが活性化していき、震災からの復興を体現しようとするもの。協力隊が中心となって事業展開しているのも特徴。          ◇新規事業の「移住定住施策と連動したあびら教育プラン推進プロジェクト」は、小中一体型の新学校の魅力とあびら教育プランの魅力の「教育」と受入れ体制や育成プログラム等の「地方での起業・挑戦の場」があることを強みとしてシティプロモーションを図ろうとしているもの。          ◇質疑応答要旨</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>&lt;外部有識者&gt;            「日本で一番世界に近いまちプロジェクト」に関して、広い町をカバーすると子どもたちの足はどうしているのか。また、デザイン、先進技術、海外とのワークショップなどを先導するには、中心人物となっている地域おこし協力隊に専門性がある人材を設定しているのだと思うが、その3人の隊員はどういう分野から募集したのか教えていただきたい。うちの学生達も子どもの交流の場を自分たちで運営しており、可能</p> </div>		

ならばその方々に授業の講師をお願いしてみたい。

<政策推進課>

まず一つ目、子どもの移動については、デマンドバスという公共交通で通えるように時間を組んでいる。多くの子は徒歩や自転車で通える距離ですので、遠方に住む数割の子を公共交通でカバーするというような状況。

二点目、これだけの幅広い教育活動を実行していくために3人の地域おこし協力隊をしっかりと見定めて人選をしているのかという点については、プロジェクトの推進のために安平町のような小さな町には居ないようなハイキャリアな方々を集めている。そうした能力の高い方を発掘して獲得するために、人材紹介を得意とする企業に委託することで、本当に優秀な方々が来てくださっている状況にある。

一度、隊員とお話をしていただければ、力がある人たちだなということがおそらく伝わると思う。

<委員>

地域おこし協力隊は三年が任期というなかで、とてもいろいろなことを実施していてすごいなと改めて関心している。任期が三年なのでどうやって続けていけるのかがとても気になるところ。町として継続性をもたせられるか。頑張っていて欲しい。

機会があるたびに言っていることだが、世界で一番近い町プロジェクトに関連して、残念ながら中学を卒業して高校へ行くと途端に変わってしまうというか、継続的な教育、一生涯の教育という点で少しさみしくなるなど感じるので、この取組を追分高等学校にも範囲を広げられないか。安平の教育の延長線上にある高等学校にしていけたら、追分高校の魅力化にもなる。他の県では県立でもユニークな高等学校があるので、なんとか頑張ってもらいたい。

<政策推進課>

まずプロジェクトは素晴らしいが継続性が心配というお話。この継続性についてはもちろん町としても考えており、まずプロジェクトの一年目、二年目はプロジェクトの内容の開発や充実といった部分を中心に進めてきた。三年目の令和3年度は今後に残す、定着させるための固めるフェーズとすることで計画している。中心となる人物がもし変わっても一定の水準のプログラム、あびら教育プランの水準を一定程度保てるような型を固める一年に位置づけている。なんとかこの一年で四年目以降も水準を下げないようにやっていけるような体制を作っていきたいと考え進めている。それから人材の継続的な確保の部分においては、いま優秀な三人を中心に進めているが、これはわからないのが実情。これは本当に人の気持ちの揺れ動きやタイミングだったり、家族環境だったり、本当にデリケートな要素が左右するため、どうなるか明言できないが、協力隊員が任期を終えても定着できるように、定着したいと思ってきている人もちゃんといるので、4つめに説明した新規のプロジェクトの中でその人たちの仕事として委託料として外注するような現時点での想定で、国の地方創生推進交付金を活用しながら考えている。

それから追分高校の話もあったが、高校に上がるとブツッとこれまでの教育が切れてしまうような印象は現状ではその通りと言わざるを得ないところはある。中学校まで培ったものが道立高校であるがゆえになかなか継続性が担保できないでいるが、高校の授業に地域の講師を派遣したりはしており、その他にも例えば部活動だとか教育課程外のところで刺さり込めないかという観点では当然情報収集している。それから真正面に仕組みから導入するのではなくて、まずは中にいる先生や生徒などの人からだという着眼点もあって、追分駅前にあるENTRANCEに追分高校生が今通うようになっている。多いときはたくさん寄っていくのだが、常連メンバーは2~3人の生徒で、その中に説明の中で紹介したABIRA Talksにも挑戦してくれた生徒がいる。こうした内側からの取組みが切り口となって生徒から高校の先生方に伝わり校長に伝わり、あるいは道教委に伝わりと、何らかを糸口に突破していきたいと考えている。

<委員>

世界で一番近い町プロジェクトの関連事業にトイレ等の整備があるが、関連しての要望で鹿公園の中に小川を渡る橋が壊れているので、せっかくの遊歩道を通行止めの

ままにしてほしくない。

それとその鹿公園の保健保安林のギリギリのところが大規模に伐採されて本当に悲しい。せっかくの素晴らしい鹿公園の森がなくなる、災害で大雨降ったときに崩れる、そういう懸念持っているのです、どうかよろしくお願ひしたい。

<政策推進課>

遊歩道については担当課に伝え、確認の上で対応してもらおう。伐採のお話はおっしゃるとおりだと思うが、対応は非常に難しいのが実情。スパッとした回答はできないが、ご意見として受け止め適切に対応していくということでご理解願ひたい。

<委員>

交流人口拡大のプロジェクトの中で2つのゲートウェイの話が出たが、道の駅については早期に100万人超えたということで素晴らしい拠点になっているが、JR追分駅の関係で室蘭線が厳しい状況にある中でどう町としては動くのか、それがもし分かればお聞きしたい。それと実態としてJRを利用してどれだけの人がこの町に来るのが疑問なところがある。

<政策推進課>

まず室蘭線は維持困難な黄色線区と言われているが、鉄路の対策についてはオール北海道で取り組んでいくというのが一番の基本。そして次に黄色線区の沿線市町が束になって利用促進を図るとというのが二本目。安平町でも独自に利用促進策を多く打っており、そうした道・沿線・町の三本の矢でなんとかこの室蘭線を維持存続しているのが基本的な取組み方法と方向性である。

それから実際にJRを利用してこの町に人が来るのかというお話。正確な数字までは把握していないが、土日を中心に平日も追分駅から道の駅へ歩いて行っている人を私自身も見ているので、これは今も一定数はいることは間違いない。もしかしたら、そうした人たちがいまは鉄道好きの方だけかもしれないが、これまで説明したプロジェクトで道の駅自体の魅力向上が図られ、商店街の魅力も高まり、駅自体にも情報発信性などが高まれば人が回遊するという構想をもってやっているのです、新型コロナの影響もあり、もう少し効果が見えるまで猶予をいただきたい。

<委員>

もう一つ追分駅と道の駅のゲートウェイに関しては、JRヘルシーウォーキングも大きな貢献をしていると思う。今年は9月の予定だが、これまでは菜の花の時期に実施しており、1日で600人の人がJRに乗ってこの町に来た。今回は時期も変わるのでどうなるかはわからないが、関連の取組みとしてはある。

<政策推進課>

そのとおりで、古くから追分に住む方もこんなに駅に人がいることはみたことがない、歩く隙間がないほどの混雑ぶり、盛況ぶりであった。委員ご自身もこのウォーキングイベントを中心的に進めてくれている方の一人であり、どうか今後ともよろしくおねがひしたい。

<委員>

安平町のプログラムは、外に向かったものがすごく多い印象を持って見ているが、町の特性などつなげて地域を活性化するとか、町の子どもたちが地域のことについても学ぶ場とかあったらいいのではと思うが、どのように考えているか。

<政策推進課>

一つ一つの事業の中身については協力隊員にお任せしているという部分が大きいので、委員が受けた印象に関してはお伝えをさせていただく。基本的な考え方としてプロジェクト会議の中で聞いているのは、もう10年～15年前から推進しているふるさと学習・学社融合事業というすでに町内の学校教育課程の中に組み込まれているプログラムがあり、郷土学習的などところはそちらで網羅、実行している。説明したプロジェクトは、その先の世界や視野を広げるといったキーワードをクローズアップさせてプログラムを作っている側面が多いのと移住者獲得のコンテンツという側面もあるので、外向きの印象を受けるものと思う。

<委員>

あびらチャンネルのことで、2時間サイクルで映像が流れているが、見たいところが少し前に終わっていたら2時間待たないと見られない。来客があったときなどに、録画もできないような気がする。非常に番組内容は良いので、なにかいい方法は。

<政策推進課>

テレビ局の番組のように番組表からの一発録画予約はできないが、時間が来たらご自身で録画ボタンを押して録画することは可能。担当課にリクエストすれば、番組の一部をDVDなどで提供してもらえるものもあるはずである。

<委員>

遊育イベントなどのことだが、ほとんど追分でやっていて、早来に住む我が子が参加しようとしても仕事を休んだりしなければ参加させられない。送迎バスや公共交通の対応をしてほしい。

それからあびら子どもたちにはあまり浸透していない。情報が伝わっておらず何それっていう状況。たまに学校からパンフレットやイベントのチラシが配られるくらいで、しかも興味を持つ子、持たない子がいるので、伝わっていないのが印象。

<政策推進課>

まず一点目は移動手段のことと開催地域の話だが、現状は委員のお話のとおり、追分地区での開催が中心である。元々の構想では、早来地区で先行し、子どもの遊び場ネットワークという団体があってそこに協力隊員が入って団体を支援しながら進めていき、次に追分に広げるといった構想だったが、女性の協力隊員がご結婚で退職移住されたり、その団体の方が別で組織を立ち上げたりと動きがあったので、早来でも北進の森で動いてはいるが、目立つ動きとしては止まってしまった印象はある。

それから二点目の子どもの中に浸透していないというお話は、私はそう認識していなかった。むしろ、隊員のことをあいきちやまつんなどととてもフレンドリーに接する姿しか見ていなかったもので、浸透していると思っていた。開始2年の段階ですべての子どもにきっちりマッチングできるとまでは考えていなかったことと、学校の休み時間に10分探究と銘打って休み時間をジャックして子どもを前に模擬授業をやるとか、センセイサポートといって教師の授業支援などにも刺さっているもので、浸透していると認識していた。委員のお話を聞くと実情は浸透していないようなので、更なるアプローチの工夫などを教育委員会や隊員らに伝えたい。

<委員>

うちの子どもはもう中学生だが、なかなかハードルが高いとか頑張らなきゃいけないという感じが正直ある様子。それから継続性がとても大事だと思うので、早来地区では動きが弱いというのは残念に思う。そうしたところは継続して頑張ってもらって、いま参加している子どもたちが成長していったときにどうなっていくのか期待したい。それと今後あびら教育プランを学校の中に入れていって、みんなに機会が与えられるようにしていくということなので、これはすごく大事じゃないかと感じている。

<政策推進課>

ありがとうございます。これから学校教育の中に入れようと構想しているので、それが図られるともっと深く、均しく広がるのではないかと期待して進めているところである。応援よろしくお願ひしたい。

<外部有識者>

ABIRA Talksをととても興味深く聞かせていただいた。中身はクラウドファンディングにもかかわらず一か所に集まって行うというのが意外な試みだなと感じた。その場に集まったサポーターの方は町民なのか、町民以外の方はいらっしゃるのか。

<政策推進課>

登壇するプレゼンターに繋がりのある方がほとんどで、友人や仕事柄のつながりのある方など様々。町内と町外の比率は6：4か7：3で町民の方が多い状況。

<外部有識者>

とても面白い試みで、町外の方もたくさんいらっしゃるというのが驚いた。私も知らなかったことなので、安平町以外にもこうした取組みを発信できるといいなと思った。

<政策推進課>

ありがとうございます。遠くは滝川から町長のお友達っていう方が、震災の時お手伝いできなかったからこれに來たと言っていたり、色んな関わりがあってこの場に参加していただけているというのが本当にありがたいという状況です。引き続き発信して町の魅力の一つとしていきたい。

(2) 新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金について・・・【資料2】  
(説明：政策推進課 木村補佐)

◇新型コロナウイルスの影響を受けている地域経済や住民生活を支援し地方創生を図るために、国の令和2年度補正予算により実施している。

◇令和2年度は約4億2千万円、令和3年度当初現在で約1億円が、安平町に対して交付決定されている。

◇この交付金を活用し、安平町が実施している新型コロナ関連事業について報告。

◇質疑応答要旨

<委員>

医療機関社会福祉施設感染拡大防止対策っていうのがあるが、これは特別養護老人ホームだとかそういうのも全部含まれているのか。

<政策推進課>

特別養護老人ホームも含まれており、障害施設なども含まれている。基本的に町内の施設は網羅されている。

<委員>

世間でも言われているが、災害が起こったときにコロナの中で災害起こったときにどう対策するのかといった対応や備えはどこかに盛り込まれるのか。

<政策推進課>

基本的には、既に公共施設などの安全安心確保事業でいろいろな感染対策の消耗品といったものは購入している。防災担当の方では、コロナ禍も踏まえた災害時の避難所運営の一定程度のシミュレーションを作成している。

<委員>

サテライトオフィスの誘致事業とあるが、東京の大企業もそうだが、まずは近くの札幌からの誘致を真剣に考えるほうが良いのでは。聞いた話だが、安平町の教育が進んでいるから移住してきて、ご主人は札幌に通っているという人もいるとのこと。そういう事例からして札幌にターゲットを当てては。それからワーケーションも。ここには健康増進のプログラムや自然があるよ、キャンプもできるよ、のように総合的に誘致を考えていかないとと思う。

<政策推進課>

ありがとうございます。移住のニーズ調査を既にやっており、どこをターゲットとしてやっていくかといったところは以前の会議でもお話をしたところだが、委員のおっしゃるとおり、安平町の子育てや教育環境に興味を感じて移住されて札幌などに通勤されている方は実際にいる。今回サテライトオフィスの誘致支援事業の方では、まず戦略づくりをまず最初にやって、どういったターゲットでどういった事業者に来てもらうをまず決めた上で、そこに絞ってアプローチをしていく。首都圏とは書いているが札幌方面も含めて少し広く考えに入れ、サテライトオフィスを使ってもらえるようにしていきたい。

<外部有識者>

勉強のために教えていただきたいが、感染症対応の診療所建設支援とは新築なのか増築なのかリノベーションなのか。この隔離の部屋などでベッド数はどのくらい増えたのか、支援の割合はどの程度か。

<政策推進課>

現在は診療所だが、昔の病院スペースを解体して建て替えを行うもの。診療所のた

めベッドはない。感染者が来ても診療対応できるよう隔離エリアを設ける形になると聞いている。支援の割合は3,000万円で事業費の10分の1を切る程度である。

<外部有識者>

経済活動の回復の事業で、アサヒメロン販売促進事業を昨年されたみたいだが、なかなか札幌のスーパーではアサヒメロンを見ることができない。アサヒメロンと検索すると楽天だとかオンライン販売が多いようですが、具体的に今回はこの販売促進事業はどういう支援を行ったのか。

<政策推進課>

J Aでアサヒメロンの即売会を苫小牧で実施したものに対して支援をしており、事業費規模でいうと60万円から70万円程度だったと聞いている。

<政策推進課>

アサヒメロンの流通先は、スーパーに卸していく過程よりも、市場に中心に物が流れていき、古い伝統がある産地なので決まったルートでお土産屋やデパート、そういった売り先が決まっているような物の流れになっている。そのため新規の店舗にはなかなか見当たらないという現状があり、なかなか名前を聞かないんだよねと言われるが、生産者の数も限られている部分ある中で、決まったところに決まった量が安定的に流れているというような理解をしていただければと。いま生産者を増やしてもっと知ってもらえるようにしたいと取り組んでいる方向性になっている。

<委員>

チャレンジショップの事業でお聞きしたいが、具体的にどういいうチャレンジショップなのか枠組みが決まっているのかどうか。なかなかコロナの状況がある中で、そこまで見込んで挑戦する人を見込めるのかという部分、うまく交流だとかその部分で結びつけられるのかなどについて聞かせてほしい。

<政策推進課>

ありがとうございます。まずチャレンジショップの枠組みは、細かい部分はこれからになるが、トレーラーハウス型の店舗を2つ置く。ただご指摘のように、そこを使う方がいないと意味が無いので、先ほど地方創生推進交付金のプロジェクトの説明で触れていたが、あびら起業家カレッジ事業ということで、起業家を育成して使ってもらったり、あるいは町内の方で、例えば特に早来地区にはカフェがないのでカフェがあるとお母さんたち、女性の方が集まりやすいという声が聞こえていたり、実際にアロマサロンとかネイルサロンをやってみたいといった女性の方がいらっしゃればそうした方に使っていただくようなイメージ。そのほか、町外の方でお話を聞いているのはウェブデザインの方とかクリエイターの方とかが活動の拠点の一つとして、特に安平町は空港から近いので使えるところないかというお話はいろいろ来ている。チャレンジショップやサテライトオフィスをソフトとハードの両方を連動させながらやっていくというものになっている。これらが実を結んで町の中に少しでも賑わいをつくっていったらと考えている。

(3) 過疎地域持続的発展市町村計画の策定について . . . . . 【資料3】  
(説明：政策推進課 笹山主査)

◇令和3年4月1日に新過疎法が施行されたことに伴い、令和3年度に市町村計画を策定する必要があり、その策定スケジュール等の概要を説明。

◇質疑応答要旨

<委員>

新たな過疎計画の区分として「再生可能エネルギーの利用の推進」が追加されているが、これに関連して、町内ではバイオマス発電所が建設される話があり、安平町の自然の搾取や環境保全の面を危惧している。木を切って電力を売るだけでなく、町にエネルギーを残すことを考えていかなければならないと感じている。再生可能エネルギーの利用を推進するならば、町がこうした企業をコントロールできる体制をとる

など対策を携えていただきたい。

また、「地域間交流の促進」という区分に関しては、農山漁村からは資源、都市部からは人材などを補完し支え合うという地域循環共生圏の考えを取り入れるのも良いと思う。

<政策推進課>

再生可能エネルギーについては、これまでもご意見をいただいております。ご意見として賜るとともに、計画案をお示しした際などにご意見やアドバイスがあればまたよろしくお願ひしたい。

地域循環共生圏については、こちらも勉強不足のところがあるので、計画の策定に向けてどのような形で取り入れることができるのかも含めて参考にさせていただく。

<委員>

「医療の確保」という区分について、現状、町内医療機関は厳しい状況に置かれていると認識している。今後さらに高齢化等によって、ますます重要度が上がることから、確保対策を進めていってほしい。

「集落の整備」については、いまの自治会・町内会をどのように維持していくかという課題があるかと思うが、町が介入した再編など含めて検討していってほしい。

<政策推進課>

医療の分野については、過疎地域における医療確保は重要なことであり、しっかりと対応すべきものと認識している。

集落の整備に関しては、町内会だけでなく少子化の影響で子ども会の存続も難しくなっているところ。行政として再編をどこまで踏み込んでいくかは考えていく必要はあるが、今後予定される地区別計画策定の議論も踏まえつつ、実情の把握と合わせて検討していく。

#### 4 その他

◇今会議で現在の委員の任期は終了となる。この間、皆さんにはご協力を賜り感謝申し上げます。

◇公募委員の募集期間は先日で終了したが、引き続き次期委員のお声掛けをさせていただいた際には、どうか快くお引き受けくださいますよう、よろしくお願ひしたい。

#### 5 閉会

以上、終了。(17:00)